

## 祖父と私

浅香 怜子

『同行者大勢』の編集人である林浩治さんより、貴女も第十一号に何か書いてみませんかとお声掛けを頂きました。素直に嬉しい気持ちの反面、心によぎるのは一抹の不安です。埼玉文学学校の、一癖どころか七癖八癖もありそうな諸先輩方の顔が浮かびます。いったい何を書けばいいのだろうとずいぶん悩みました。悩む時間は私自身と向き合う時間となつて、繰り返し思うのは一緒に暮らしていた祖父のことでした。実は祖父も、文学が好きで、時おり同人誌に随筆を寄せたりしていました。遠い記憶を辿りました。祖父の書齋は縁側にあります。まだ私が小学生だったころから、できあがつた原稿を私に見せ感想を聞かせてほしいと言うのです。ですが幼い私は、「良かった」「良いと思った」などという単純な言葉で済ませてしまいました。もっと他に言いようがあったらうらと、今は思います。祖父が作品を書き上げるたび、一番初めの読者になるのはいつも私でした。そんな祖父に影響されて私が初めて書いた「作品」の読者は、やはり祖父でし

た。小学五年生の時だったと思います。いつものように祖父の出来あがつたばかりの原稿を読んでいたときのことでした。私は不思議な高揚感をおぼえました。祖父の描く作品世界に浸りながら想像をめぐらせていると、いつしか私の頭のなかで新しい物語が浮かんできて、その物語が走り出すのです。まるで押し寄せてくるような感覚で、たまらなくなつた私はこれを書いてみようと思ひ立ち、居間に行き、テーブルの上に置いてあつた新聞の折り込み広告のなから裏が白紙のものを選んで、そのときの衝動をそのままに、一気に書き上げました。表は朱一色で刷られた地元スーパーのチラシです。チラシの裏に鉛筆で書いたのはどんな話だったかというところ。初老の庭師がいつものように仕事をしていると、その家に若いセールスマンがやって来て、「植木屋ですか」と言うのが聞こえてくる。ちよつと小ばかにするようなその言い方にムツとするが、黙々と仕事をつづけていく、というような短

いい話です。私の家にも庭に松の木があって、「門かぶりの松」というのですが、たまに職人さんと呼んで手入れをしてもらっていました。職人さんは松の手入れのあと、縁側で祖父母と漬物をつまみながらお茶を飲むのが常で、私もお手伝いでお茶を運んだりしていました。何となくその人を思い浮かべながら書きましたが、いま思えば、小学五年生が書いたにしてはちよつと渋すぎる話です。

私は、その「処女作」らしきものを祖父に読んでもらいたくて、すぐに縁側の書斎に行きました。読み終えた祖父は、「うん」とじつと考え込んでいます。普段は何をしても褒めてくれるような優しい祖父でしたが、そのときは違つたように記憶しています。私は興奮に水をさされたというのか、あまり思い出すことができません。祖父の作品に感化されたようなものですが、それをどうこう言われたわけではなかつたと思います。ただ、作品に対する感想でした。どんなことを言ってくれたのか、必死になつて思い出そうとするのですが、そこだけ霧がかかつたように、言葉が聞こえてきません。それなのに、私の書いた原稿を見つめる祖父の顔、その姿を見つめて突つ立っていた小学生の私、そして歯がゆさを感じながら縁側に後になるところまで鮮明に覚えていて、まるで無声映画のように記憶の中を流れていくのです。その

日、あとで祖父は私のところにやってきて、「じいちゃんねえ、何度も読んでみたんき」と言いました。今度は少しだけ褒めてくれました。続けて、「これは、怜子ちゃんの初めて作品だから、大事に取つておいたほうがいいよ」と真面目に言いました。私はちよつと照れくさくて、「え、こんなのもう要らないよ」と言う祖父は少し困つたような顔をして行つてしまいましたが、本当は今でも引き出しにしまつてあります。

今はもう他界した祖父に私の書いたものを読んでもらうことは叶いませんが、ときどき雑文を書いたりしていると、祖父に見せたら何て言うだろうと思うことがあります。きつと思ひ通りの答えが返つてこないはずですが、想像すると私を柔らかい気持ちにしてくれるのです。

